

地震を想定した実践的避難訓練における効果的なふりかえり指導の検討

群馬大学 学生会員 ○千葉 恭平
群馬大学 正会員 金井 昌信

1. はじめに

2011年東日本大震災を受け、文部科学省¹⁾は、児童生徒の発達や地域の実情に応じた防災教育の実践を推奨している。これを受けて、小中学校における地震を想定した実践的避難訓練が開発・実践されている。具体的には、①児童生徒に訓練実施時間帯を知らせずに実施、②毎年、異なる様々な状況想定の下で実施、③ふりかえり指導を各学級で実施する方法が開発され、教育効果の計測が行われてきた²⁾³⁾。しかし、未だに多くの小中学校では、児童生徒へ訓練実施時間帯を事前に知らせて、教室で授業中に地震が発生したことを想定した避難訓練を実施している。

実践的避難訓練では、児童生徒が様々な場所にいるため、教員は各児童生徒がどのような避難行動を取ったかを把握することができない。そのため、学級を受け持っている教員（以下、学級担任）が、ふりかえり指導にて訓練時に児童生徒がどこにいて、どのような行動を取ったかを把握し、適切な身の守り方を指導することが必要である。

そこで本稿では、地震を想定した実践的避難訓練を実施した群馬県吉岡町および南牧村の小中学校の教員を対象としたアンケート調査から、実践的避難訓練の要件の一つであるふりかえり指導に着目し、効果的なふりかえり指導方法を検討する。

2. 吉岡町での実践概要と実践結果の考察

吉岡町で実施した避難訓練概要を表1に示す。2019年1月8日に、群馬県教育委員会および吉岡町と連携して、群馬県吉岡町の全小中学校3校で地震を想定した合同避難訓練を実施した。

ふりかえり指導内容および実践方法については、著者らが以下に示す内容を各校に提案し、その内容に応じた資料を作成して提供した。提案した具体的な内容は、①児童に訓練開始時にいた場所、訓練で取った行動をふりかえりシートに記入、②記入した内容を各クラスで意見交流、③学年進行に応じて様々な状況で地

震が発生した場合の身の守り方や揺れが収まった後の行動の学習である。このふりかえり指導によって、自身の行動は本当に身を守ることにつながるものであったのか、危険はなかったのかを児童自身が考えることで、地震発生時には周りの様子を自らで判断して行動することの重要性を理解することをねらいとした。

訓練では校内放送を用いて地震の発生を想定した避難訓練を開始することを伝え、緊急地震速報を流した。児童生徒は各自の判断で身を守る行動をとった後、校庭に避難した。校庭では児童の点呼をとり、外部者による講評を行った。その後、各学級に戻り、学級担任が中心となって、著者らが提案したふりかえり指導を実施してもらった。なお、提案した内容をすべて実施するかどうかは学級担任に一任した。そのため、ふりかえり指導に対する教員の所感と実施状況を把握するために避難訓練実施後に、教員を対象にアンケート調査を実施した（配布数：113名、回収率：84.1%）。

この調査結果より、これまでに「児童生徒に訓練実施時間帯を知らせずに実施したことがある」教員の割合は36.6%、「授業時間以外に地震が発生したことを想定して実施したことがある」教員の割合は40.0%であり、『事前に告知して授業時間にしか訓練を実施したことがない』教員の割合は52.6%であった。定型化した同じ内容の訓練を繰り返している現状が改めて確認された。

以下、アンケート回答者のうち学級担任（71名）のみを対象にふりかえり指導に関する調査結果を示す。まず「訓練実施前に提供された指導内容や資料を見て、ちゃんと指導することができるのか不安に思ったか」という問いに対して「不安に思った」が8.5%、「少し不安に思った」が52.1%、「不安に思わなかった」が39.4%であった。次に「訓練実施後、ふりかえり指導をどの程度おこなったのか」を把握した結果、「ふりかえりシート記入＋意見交流＋ふりかえり指導案の全て」を実施したのは55.7%、「ふりかえりシート記入＋意見交流＋ふりかえり指導案の一部」を実施したのは30.0%、

キーワード 防災教育, 避難訓練, 地震

表1 吉岡町と南牧村の避難訓練実施概要

	吉岡町	南牧村
日時	2019年1月8日	2019年8月29日
対象	小学校2校・中学校1校 生徒2,064名、教員113名	小学校1校 生徒27名、教員9名
訓練内容	<ul style="list-style-type: none"> ・実施時間帯を知らせずに実施 ・清掃時間、休み時間に実施 ・緊急地震速報音を放送後、校庭へ移動 	<ul style="list-style-type: none"> ・実施時間帯を知らせずに実施 ・休み時間に実施 ・緊急地震速報音を放送後、校庭へ移動
ふりかえり指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師（3名）による講評 ・ふりかえりシートの記入 ・学年進行に応じた事後指導（学級担任） 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師（第二著者）による講評 ・ふりかえりシートの記入

「ふりかえりシート記入＋意見交流」しか実施しなかったのが14.3%であった。学級担任によってふりかえり指導の実施状況に差があることが確認された。

3. 南牧村での実践概要と実践結果の考察

吉岡町での実践を踏まえて、2019年8月29日に、群馬県南牧村の小学校1校で地震を想定した実践的避難訓練を実施した。実施概要は表1に示す通りである。訓練の実施方法・内容は吉岡町と同様であるが、ふりかえり指導は全校児童を対象に外部講師（第二著者）が行なった。この理由は、吉岡町での実践結果より、資料提供だけでは各担任が効果的なふりかえり指導を行うことに限界があると判断したためであり、この実践によって以下の2点をねらいとした。①まずは外部講師が実践する様子を見てもらうことで、ふりかえり指導はどうあるべきかを教員に示す、②現場の教員に指導内容を見てもらうことを通じて、どのような点が児童生徒にとって効果的な指導となっているのかを把握する。なお、指導内容は吉岡町と同様である。

第二著者が実施したふりかえり指導の評価と教員自身がふりかえり指導を行うことを想定した場合に必要な支援などを把握するために、避難訓練実施後に教員を対象にアンケート調査を実施した（配布数9名、回収率：100%）。これより、第二著者のふりかえり指導に対して、「子どもにしっかり考えさせ、発言を促していた」、「いろいろの場所、場面を考えさせる時間があつた」といった、児童に身を守る行動について主体的に考えさせる指導内容であることが高く評価されていた。このような評価より、実践的避難訓練の事後指導においては、例えば「おはしも（押さない、走らない、しゃべらない、戻らない）」のように、「地震発生時にはこうすべき」という行動規範や一般的な知識を教示するような内容ではなく、実際に児童生徒がとった行動

を学習題材として、学級全体でその行動の善し悪しや問題点を指摘し合うことが重要であることを理解してもらえたといえよう。

また、学級担任自身がふりかえり指導を実施することを想定した時の支援や要望として、「いろいろな避難の仕方の事例を知りたい」、「防災に関する研修などしていただけると自分の知識が増え、充実した指導が出来ると思う」といった自身の防災に関する知識を深めることを目的とした支援をしてほしいことが確認できた。南牧村での実践では、第二著者が児童にふりかえり指導をして訓練は終了となったが、訓練当日の放課後などに研究授業などのように、ふりかえり指導に関する校内研修を行うことで、教員の理解はさらに深まるものと考えられる。

4. おわりに

今後は、本稿の実践によって確認された効果的なふりかえり指導を、現場の教員に広く実践してもらうための普及方策について検討していきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省：学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開，2013.https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm（2020.1.10閲覧）
- 2) 永田俊光，木村玲欧：緊急地震速報を利用した「生きる力」を高める防災教育の実践－地方気象台・教育委員会・現場教育の連携のあり方－，地域安全学会論文集，No.21，pp.81-88，2013.
- 3) 秦康範，酒井厚，一瀬英史，石田浩一：児童生徒に対する実践的防災訓練の効果測定－緊急地震速報を活用した抜き打ち型訓練による検討－，地域安全学会論文集，No.26，pp.45-52，2015.

謝辞：本研究はJSPS 科研費 JP18K04384 の助成を受けたものである。

